

国内の畜産物の需給動向

牛 肉

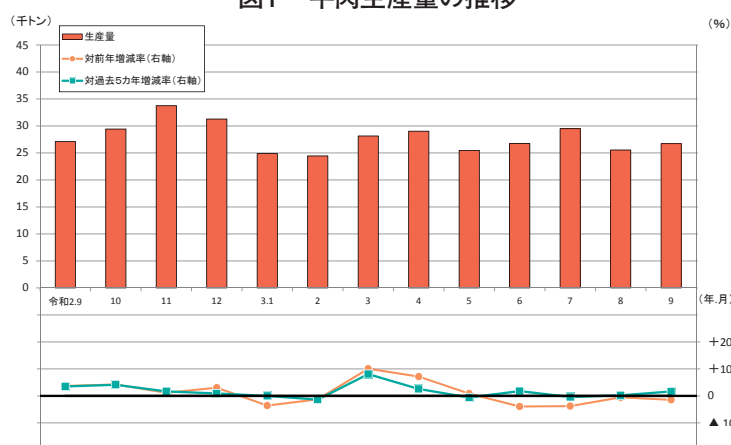
3年9月の牛肉生産量、前年同月比1.5% 減

1 令和3年9月の牛肉生産量は、2万6717トン（前年同月比1.5% 減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。品種別では、和牛は1万2390トン（同2.4% 減）、乳用種は7275トン（同2.1% 減）と、ともに前年同月をわずかに

に下回った。一方で、交雑種は6605トン（同1.1% 増）と前年同月をわずかに上回った。

なお、過去5カ年の9月の平均生産量との比較では、1.7% 増とわずかに上回る結果となった。

図1 牛肉生産量の推移



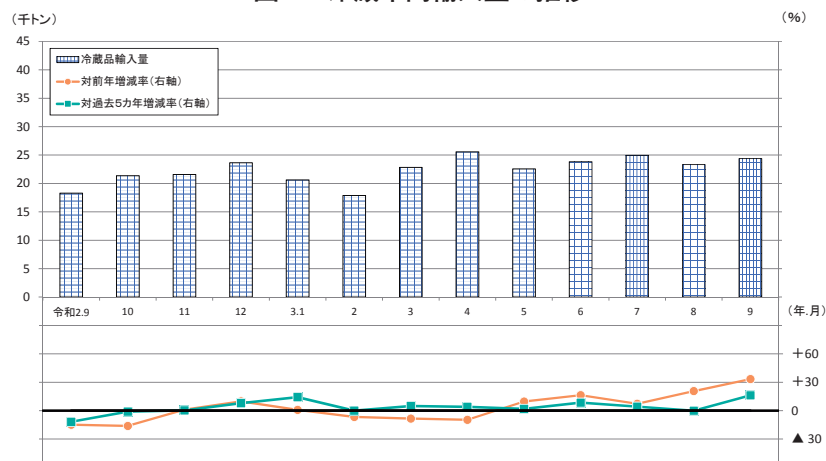
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 9月の輸入量は、冷蔵品は、前年同月の輸入量が北米工場の作業効率の低下および豪州の干ばつ後の牛群再構築による生産量減少に伴う現地価格の高騰などにより少なかったことなどから、2万4377トン（同33.3% 増）と前年同月を大幅に上回った（図2）。冷凍品は、米国産および豪州産の現地価格の高騰などによる輸入量の減少分を他国産の冷凍品で補う動きがあった

ことから、2万6164トン（同0.8% 増）と前年同月をわずかに上回った（図3）。この結果、全体では5万566トン（同14.3% 増）と前年同月をかなり大きく上回った。

なお、過去5カ年の9月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は16.2% 増と大幅に上回った一方、冷凍品は9.8% 減とかなりの程度下回る結果となった。

図2 冷蔵牛肉輸入量の推移



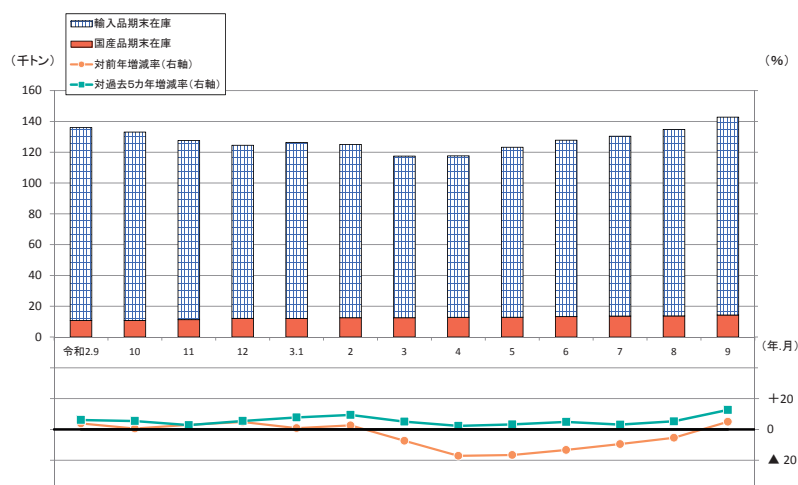
たものの、営業時間の短縮などにより客数が減少したことから、同1.3%減と前年同月をわずかに下回った。また、焼き肉は、緊急事態宣言などによる時短営業や酒類提供の自粛の影響が続き、同29.6%減と前年同月を大幅に下回った。

4 9月の推定期末在庫は、14万2769トン（同5.0%増）と前年同月をやや上回った（図4）。このうち、輸入品は

12万8479トン（同2.6%増）と前年同月をわずかに上回った。

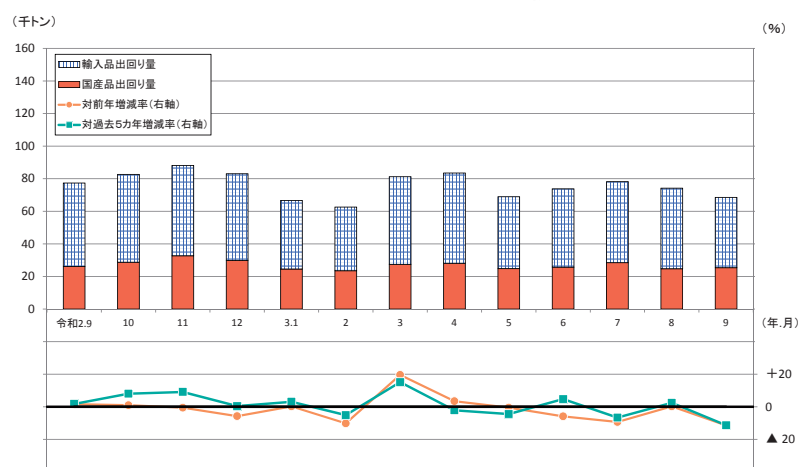
推定出回り量は、6万8549トン（同11.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図5）。このうち、国産品は2万5371トン（同2.7%減）とわずかに、輸入品は4万3178トン（同15.8%減）とかなり大きく、いずれも前年同月を下回った。

図4 牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 今岡 峻人）

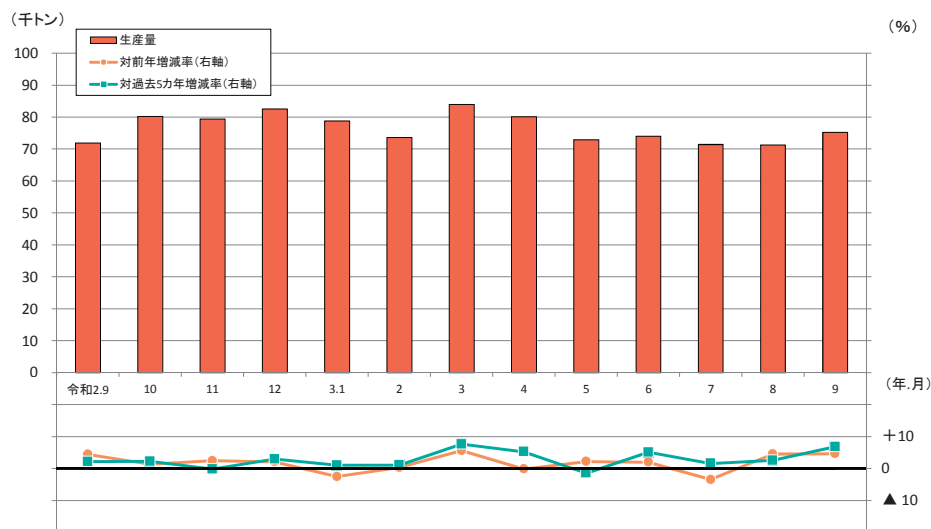
豚 肉

3年9月の豚肉生産量、前年同月比4.6% 増

1 令和3年9月の豚肉生産量は、7万5182トン（前年同月比4.6% 増）と前年同月をやや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の9月の平均生産量との比較では、6.8% 増とかなりの程度上回る結果となった。

図1 豚肉生産量の推移



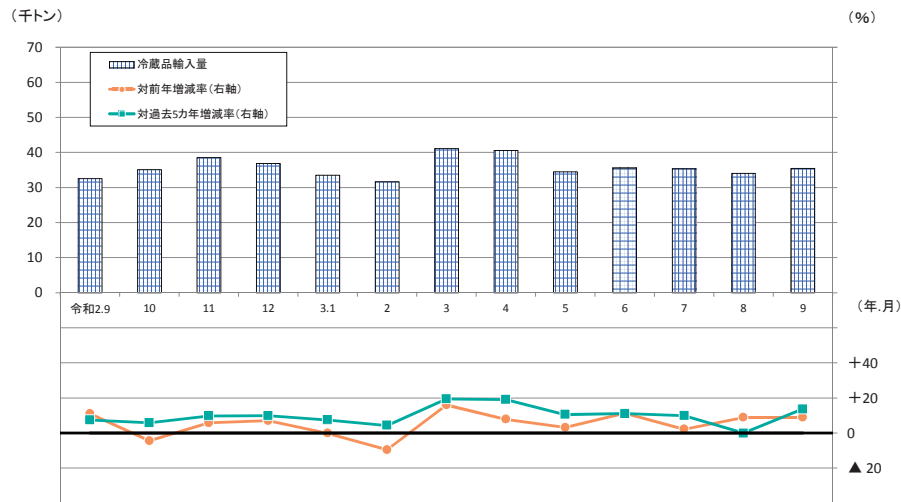
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2 9月の輸入量は、冷蔵品は、国内における内食需要が堅調なことなどから、3万5436トン（同8.8% 増）と前年同月をかなりの程度上回った（図2）。冷凍品は、国内在庫が高い水準であったことなどにより前年の輸入量が少なかったことに加え、中国の買い付けが弱まったことにより相場が下がった欧州産の輸入量が増えていることなどから、3万8776トン（同

18.0% 増）と前年同月を大幅に上回った（図3）。この結果、全体では7万4211トン（同13.4% 増）と前年同月をかなり大きく上回った。

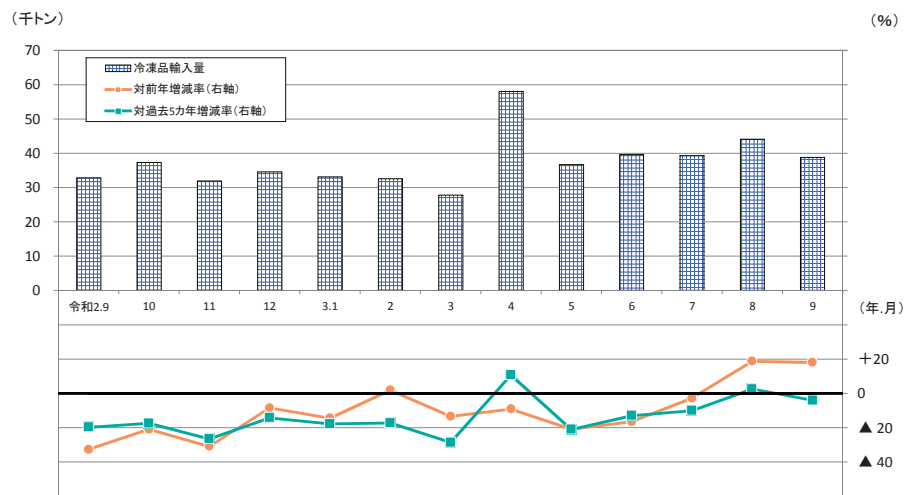
なお、過去5カ年の9月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は13.7% 増とかなり大きく上回った一方、冷凍品は4.0% 減とやや下回る結果となった。

図2 冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図3 冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

3 9月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、645グラム（同7.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。

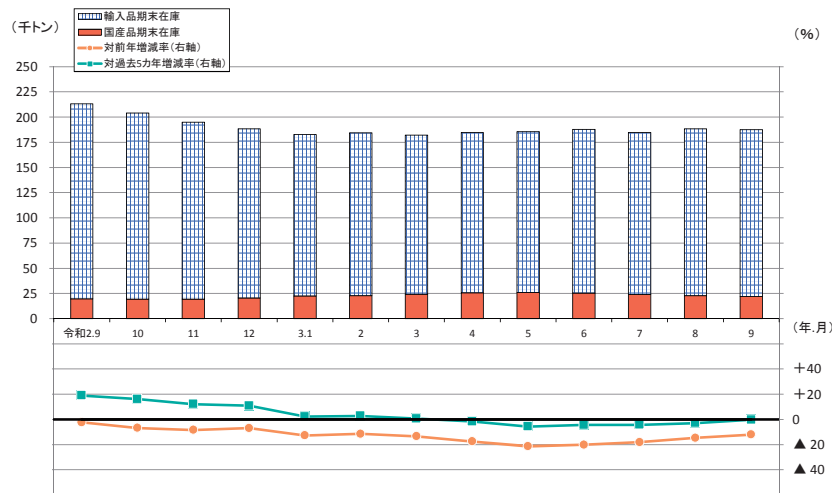
なお、過去5カ年の9月の平均消費量との比較では、12.0%増とかなり大きく上回る結果となった。

4 9月の推定期末在庫は、18万7419トン（同12.0%減）と前年同月をかな

り大きく下回った。このうち、輸入品は、16万5491トン（同14.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図4）。

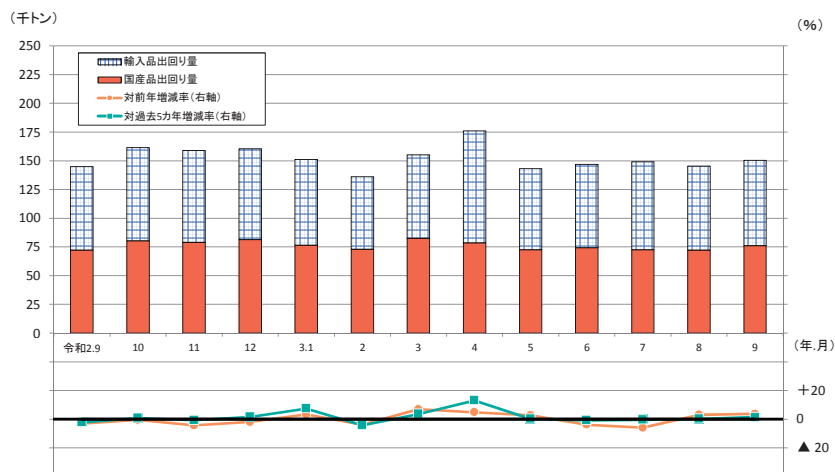
推定出回り量は15万310トン（同3.7%増）と前年同月をやや上回った（図5）。このうち、国産品は7万6016トン（同5.0%増）とやや、輸入品は7万4293トン（同2.4%増）とわずかに、いずれも前年同月を上回った。

図4 豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図5 豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

(畜産振興部 田中 美宇)

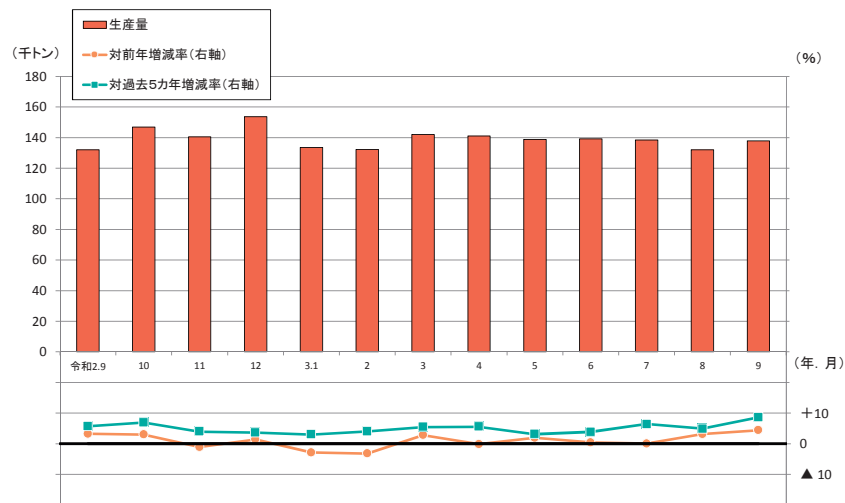
鶏 肉

3年9月の鶏肉生産量、前年同月比4.4% 増

1 令和3年9月の鶏肉生産量は、好調な需要を背景に、13万7821トン（前年同月比4.4% 増）と前年同月をやや上回った（図1）。

なお、過去5カ年の9月の平均生産量との比較では、8.6% 増とかなりの程度上回る結果となった。

図 1 鶏肉生産量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

注 1：骨付き肉ベース。

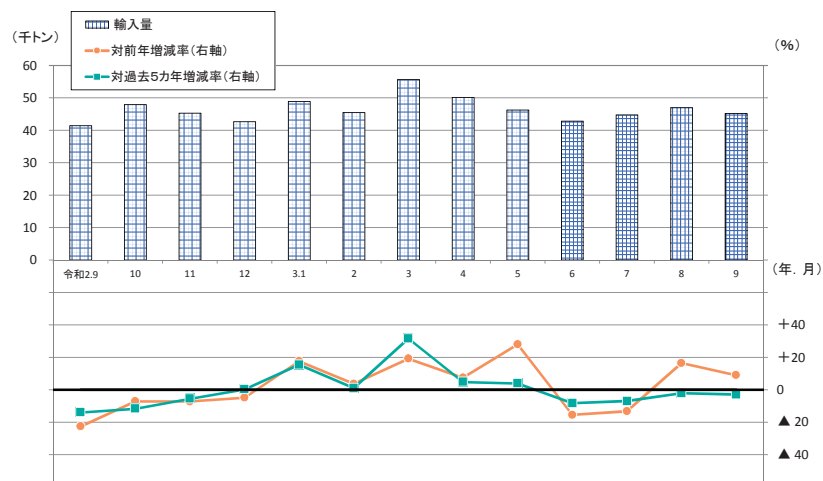
注 2：成鶏肉を含む。

2 9月の輸入量は、前年同月の輸入量が、在庫が高い水準で推移していたことにより少なかったことなどから、4万5194トン（同9.0%増）と前年同月をかなりの

程度上回った（図2）。

なお、過去5カ年の9月の平均輸入量との比較では、2.9%減とわずかに下回る結果となった。

図 2 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

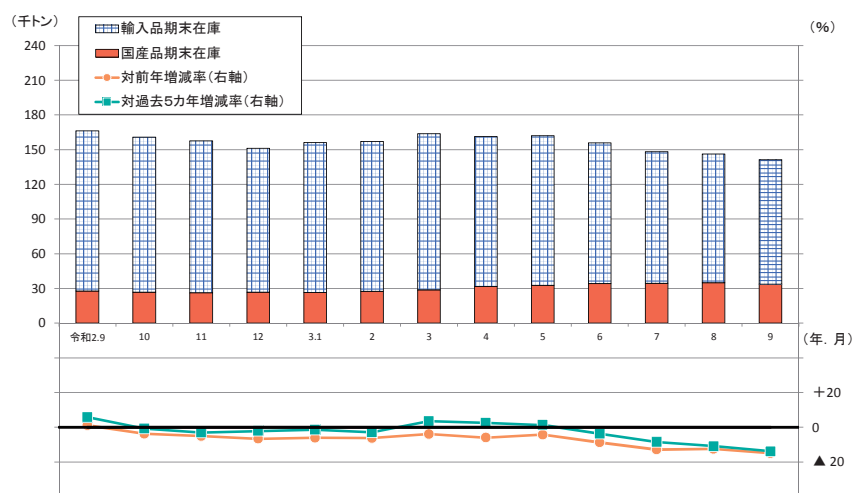
3 9月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、528グラム（同11.1%増）と前年同月をかなり大きく上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の9月の平均消費量との比較では、16.1%増と大幅に上回る結果となった。

4 9月の推定期末在庫は、14万1357トン（同15.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図3）。このうち、輸入品は10万7584トン（同22.3%減）と前年同月を大幅に下回った。推定出回り量は、18万7964トン（同

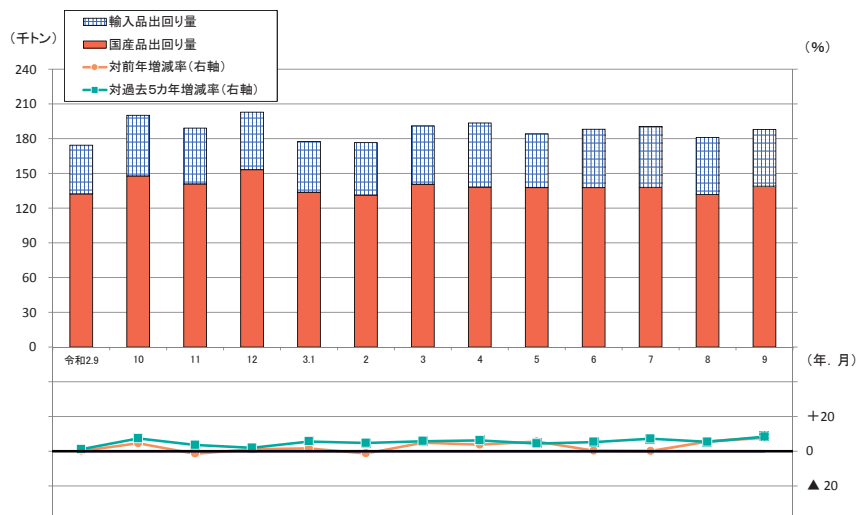
7.8%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図4）。このうち、国産品は13万8914トン（同5.1%増）とやや、輸入品は4万9050トン（同16.3%増）と大幅に、いずれも前年同月を上回った。

図3 鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図4 鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 前田 絵梨）

令和3年度上半期の食肉需給

令和3年度上半期（4～9月）の食肉の畜種別の需給動向は以下の通り。

1 牛肉

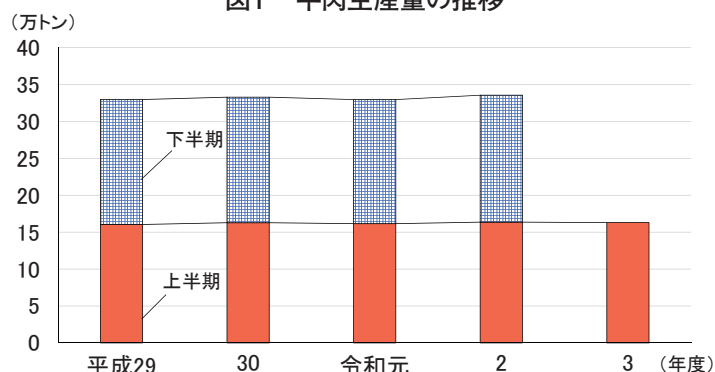
生産量、和牛は増加するも乳牛・交雑牛は減少

令和3年度上半期（4～9月）の牛肉生産量は、和牛は増加したものの、乳牛および交雑牛が減少したことから、16万2994トン（前年同期比0.4%減）と前年同期をわずかに下回った（図1）。

和牛は、繁殖雌牛の増頭や受精卵移植によ

る和子牛の生産拡大などにより、7万7722トン（同0.4%増）と前年同期をわずかに上回った。一方、乳牛および交雑牛は、性判別精液の活用や上述の和子牛の生産拡大により、乳牛は4万2614トン（同1.7%減）、交雑牛は3万9959トン（同0.8%減）と、ともに前年同期をわずかに下回った。

図1 牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量、冷蔵品は増加するも冷凍品は減少

上半期の牛肉輸入量は、冷蔵品は増加したものの、冷凍品が減少したことから、31万3479トン（前年同期比0.1%減）と前年同期並みとなった（図2）。

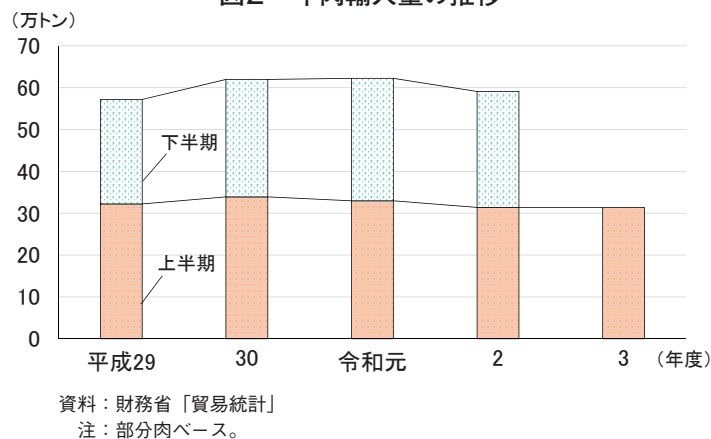
主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、14万4605トン（同11.0%増）と前年同期をかなり大きく上回った。このう

ち輸入量の多い米国産は全体の52%、豪州産は同37%を占めた。米国産は、前年同期の輸入量がCOVID-19の拡大に伴う現地工場の操業停止の影響などにより少なかったことから、7万5539トン（同22.3%増）と前年同期を大幅に上回った。一方、豪州産は、干ばつ後の牛群再構築による生産の減少に伴う現地相場の高騰などにより、5万3011トン（同7.9%減）と前年同期をかなりの程度下回った。

主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、16万8780トン（同8.0%減）と前年同期をかなりの程度下回った。このうち輸入量の多い豪州産は全体の43%、米国産は同29%を占めた。豪州産は、冷蔵品と同様の理由から7万1927トン（同8.6%

減）とかなりの程度、米国産は、前年同期の輸入量が不足していた冷蔵品を補う動きなどで多かったことから、4万9637トン（同31.1%減）と大幅に、いずれも前年同期を下回った。

図2 牛肉輸入量の推移



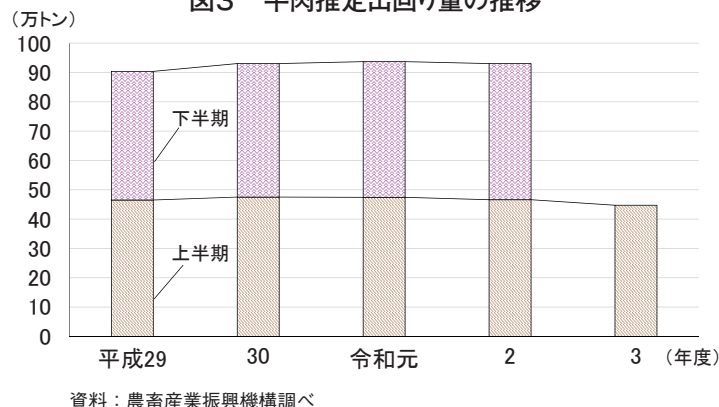
推定出回り量、国産品・輸入品ともに減少

上半期の牛肉推定出回り量は、東京都などへの緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の適用が長期化したことによる外食需要の減少などにより、44万7189トン（前年同期比4.0%減）と前年同期をやや下回った（図3）。このうち、国産品は、15万7258トン（同2.5%減）とわずかに、輸入品は

28万9931トン（同4.9%減）とやや、いずれも前年同期を下回った。

上半期末（9月末）の牛肉推定期末在庫は14万2769トン（前年同月比5.0%増）と前年同月をやや上回った。このうち、輸入品は12万8479トン（同2.6%増）とわずかに、国産品は1万4290トン（同33.1%増）と大幅に、いずれも前年同月を上回った。

図3 牛肉推定出回り量の推移



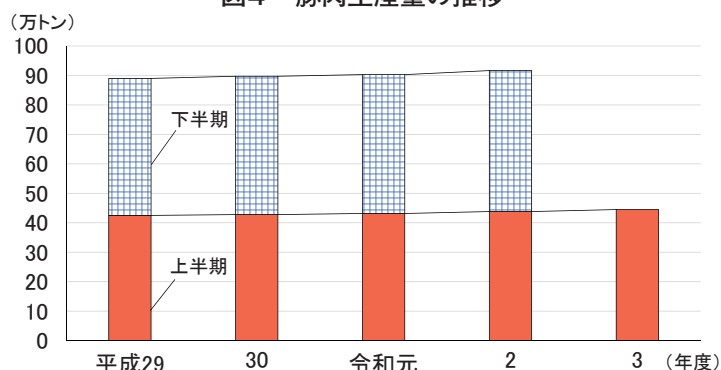
2 豚肉

生産量、わずかに増加

令和3年度上半期（4～9月）の豚肉生産量は、と畜頭数および枝肉重量が増加したこ

とから、44万4844トン（前年同期比1.5%増）と前年同期をわずかに上回った（図4）。

図4 豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量、冷蔵品は増加するも冷凍品は減少

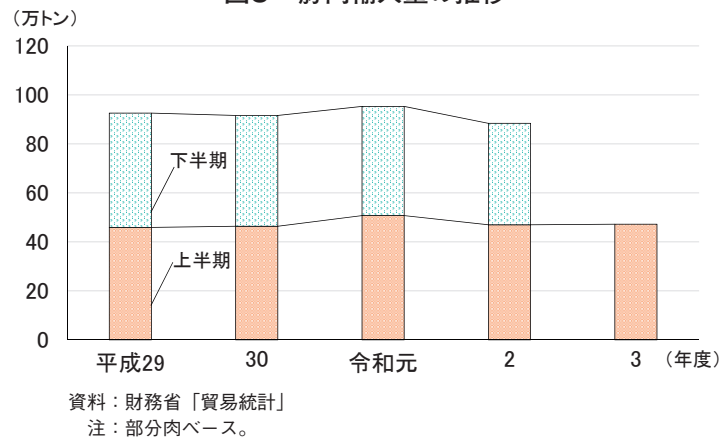
上半期の豚肉輸入量は、冷蔵品は減少したものの、冷蔵品が増加したことから、47万2022トン（前年同期比0.5%増）と前年同期をわずかに上回った（図5）。

主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、前年同期の輸入量がCOVID-19の拡大に伴う北米の現地工場の操業停止の影響などにより少なかったことに加え、内食需要が堅調だったことから、21万5493トン（同6.9%増）と前年同期をかなりの程度上回った。このうち輸入量の多い米国産は全体の49%、カナダ産は同47%を占め、米国産は10万5598トン（同10.3%増）とかなりの程度、カナダ産は10万

747トン（同4.1%増）とやや、いずれも前年同期を上回った。

主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、外食需要の減少に加え、北米の国内需要の増加による現地相場の高騰などから、25万6520トン（同4.4%減）と前年同期をやや下回った。このうち輸入量が多いスペイン産は全体の24%、メキシコ産は20%、デンマーク産は17%を占めた。国別に見ると、スペイン産（6万1027トン、同0.9%増）、メキシコ産（5万1635トン、同9.3%増）、デンマーク産（4万4344トン、同12.2%増）などは増加したものの、米国産（2万3997トン、同17.5%減）、カナダ産（1万8222トン、同4.4%減）などが減少した。

図5 豚肉輸入量の推移



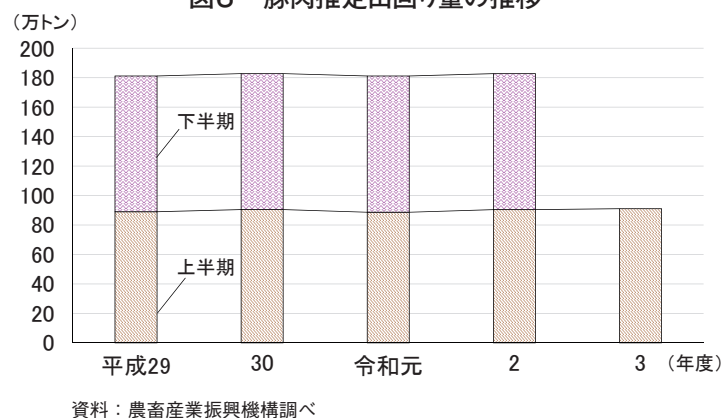
推定出回り量、国産品・輸入品ともに増加

上半期の豚肉推定出回り量は、東京都などへの緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の適用が長期化したことにより外食需要は減少したものの、内食需要や総菜などの持ち帰りといった中食需要は堅調だったことから、91万747トン（前年同期比0.7%増）と前年同期をわずかに上回った（図6）。このうち、国産品は44万6336トン（同

0.8%増）、輸入品は46万4411トン（同0.6%増）と、ともに前年同期をわずかに上回った。

上半期末（9月末）の豚肉推定期末在庫は18万7419トン（前年同月比12.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った。このうち、輸入品は16万5491トン（同14.4%減）と前年同月をかなり大きく下回った一方、国産品は2万1928トン（同11.4%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

図6 豚肉推定出回り量の推移



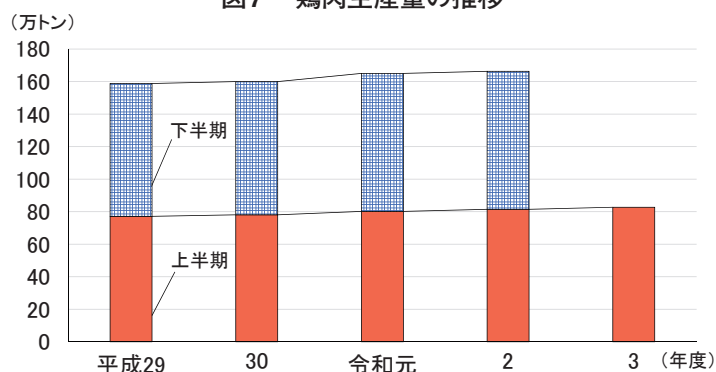
3 鶏肉

生産量、わずかに増加

令和3年度上半期（4～9月）の鶏肉生産量は、近年の好調な鶏肉消費を背景に、生産

者の増産意欲が引き続き高かったことから、82万7224トン（前年同期比1.6%増）と前年同期をわずかに上回った（図7）。

図7 鶏肉生産量の推移



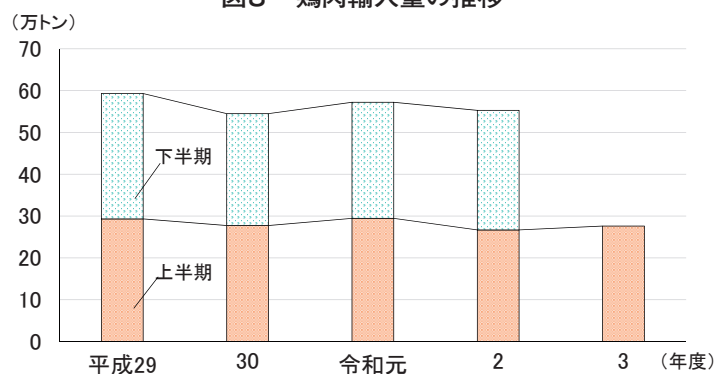
資料：農畜産業振興機構調べ
注：骨付き肉ベース。成鶏肉を含む。

輸入量、ブラジル産は減少するも、タイ産は増加

上半期の鶏肉輸入量は、前年同期の輸入量が輸入品の国内在庫が高水準で推移していたことなどにより少なかったことに加え、内食需要や中食需要が堅調だったことから、27万6076トン（前年同期比3.5%増）

と前年同期をやや上回った（図8）。このうち輸入量が多いブラジル産は全体の71%、タイ産は同26%を占め、ブラジル産は、19万5278トン（同4.0%減）と前年同期をやや下回った一方、タイ産は、7万1316トン（同27.1%増）と前年同期を大幅に上回った。

図8 鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

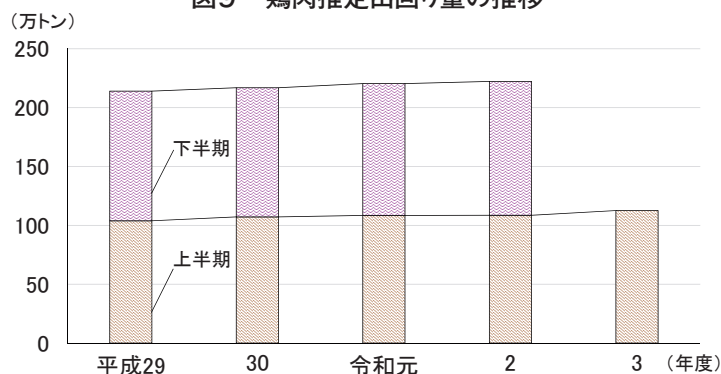
推定出回り量、国産品・輸入品ともに増加

上半期の鶏肉推定出回り量は、東京都などへの緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の適用が長期化したことにより外食需要は減少したものの、内食需要や空揚げなどの持ち帰りといった中食需要は堅調だったことから、112万5745トン（前年同期比3.7%増）と前年同期をやや上回った（図9）。このうち、主に家計消費用に仕向けられる国産品は82万2231トン（同0.5%増）と

わずかに、大部分が加工用、外食・中食用に仕向けられる輸入品は30万3514トン（同13.4%増）とかなり大きく、いずれも前年同期を上回った。

上半期末（9月末）の鶏肉推定期末在庫は14万1357トン（前年同月比15.0%減）と前年同月をかなり大きく下回った。このうち、輸入品は10万7584トン（同22.3%減）と前年同月を大幅に下回った一方で、国産品は3万3773トン（同21.6%増）と前年同月を大幅に上回った。

図9 鶏肉推定出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部 前田 絵梨）

牛乳・乳製品

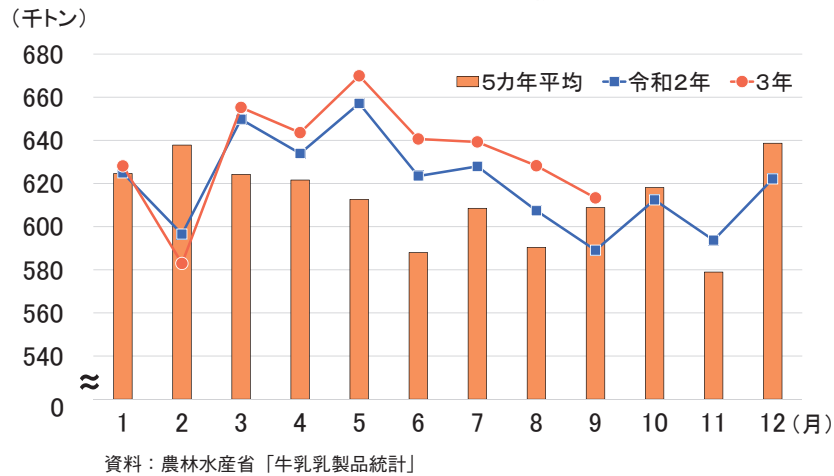
生乳生産量好調も北海道の道外移出量は4カ月連続で前年同月比減

全国の生乳生産量、前年同月比4.1%増

9月の生乳生産量は61万3294トンと前年同月を4.1%上回った。地域別に見る

と、北海道は35万1830トン（前年同月比4.2%増）、都府県は26万1464トン（同4.0%増）といずれも前年同月を上回った（農林水産省「牛乳乳製品統計」、図1）。

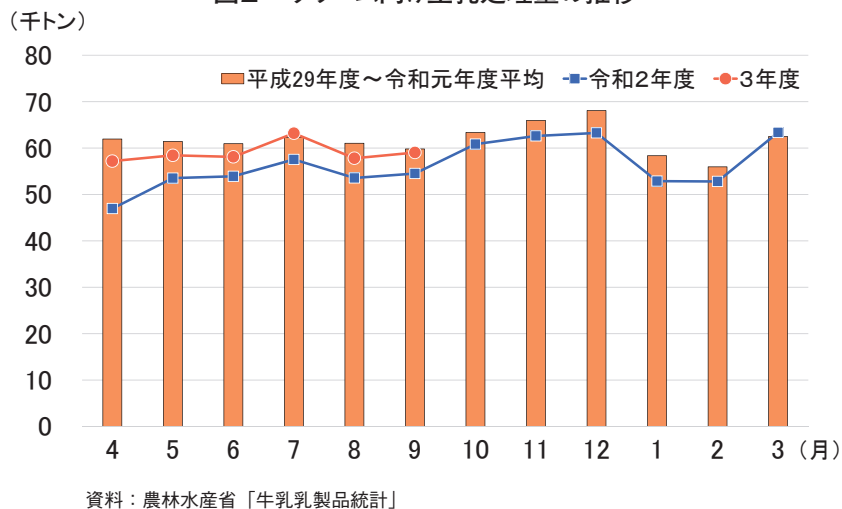
図1 生乳生産量の推移



用途別生乳処理量を仕向け先別に見ると、牛乳等向けが3万4千528.8トン(同2.7%減)と4カ月連続で前年同月を下回った。学校給食用向けが、一部自治体における小中学校の夏休み延長や臨時休校などにより、前年度を下回った。乳製品向けは2万6千384.9トン(同14.6%増)と4カ月連続で前年同月を上回った。うち脱脂粉乳・バター等向けは1万2千374.2トン(同27.2%増)

と4カ月連続で前年同月を上回り、生乳需給の調整弁としての仕向けが続いている。また、クリーム向けは5万9千083.3トン(同8.3%増)と7カ月連続で前年同月を上回っている。前年に出された1回目の緊急事態宣言の際の仕向け量急減の反動などにより前年を上回って推移しているとみられる(農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」、図2)。

図2 クリーム向け生乳処理量の推移



上半期の生乳生産量、北海道・都府県いずれも好調

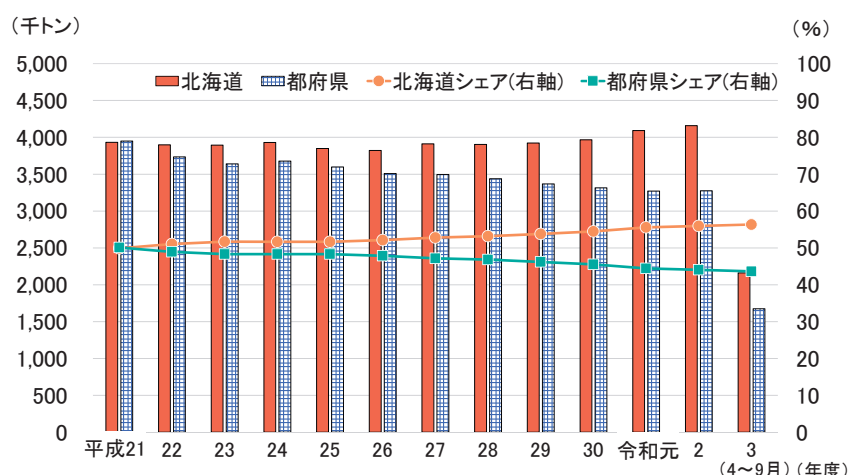
令和3年度上半期（4～9月）の全国の生乳生産量は383万4833トン（前年同期比2.6%増）と前年度をわずかに上回った。地域別に見ると、北海道は216万921トン（同2.9%増）、都府県は167万3912トン（同2.2%増）であり、それぞれの月別実績も、4～9月を通じて前年を上回って推移している。

ホクレン農業協同組合連合会が公表した生

乳受託乳量速報値によると、帯広や中標津、北見などでの生産量は昨年に引き続き増加傾向であり、北海道の生乳生産量の伸びをけん引している。

都府県においては東北と沖縄がわずかに前年度を下回っているものの、関東を中心に他地域でも増産しており、都府県全体では前年度を上回った。しかしながら、北海道との生乳生産量シェアの差は平成21年度以降拡大が続いており、現在の比率は北海道56：都府県44となっている（農林水産省「牛乳乳製品統計」、図3）。

図3 北海道と都府県の生乳生産量とシェアの推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

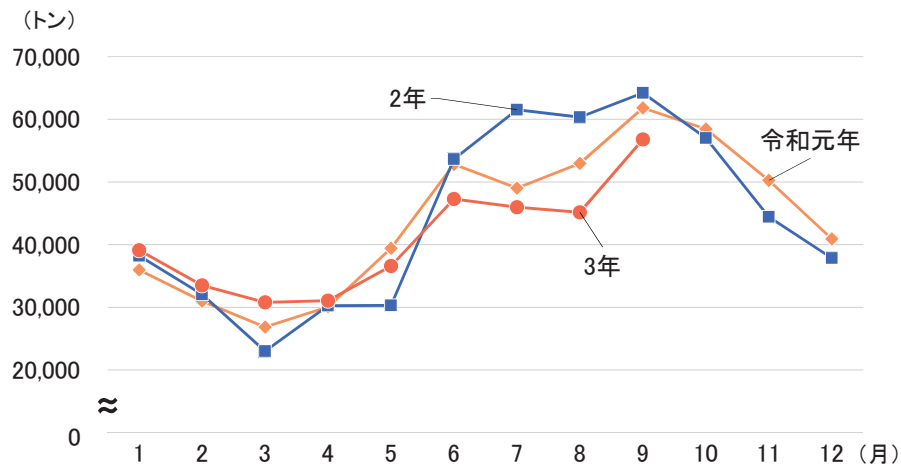
北海道の生乳移出量減少傾向、これに伴い乳製品の在庫量が増大

9月の生乳の道外移出量は、5万6787トン（前年同月比11.6%減）と、前年をかなり大きく下回った（図4、農林水産省「牛乳乳製品統計」）。この減少は6月から継続しており、生乳の牛乳等向け処理量も同様に6月から前年同月を下回っている。これは、三大都市圏などへ緊急事態宣言およびまん延防

止等重点措置が長期にわたって適用されていたことや、天候不順によって飲用需要が落ち込んだことなどによるとみられる。

なお、これに伴い北海道の生乳は保存の利くバターや脱脂粉乳に多く仕向けられている。直近の在庫量は、バターが前年同月比8.0%増の4万1684トンで、脱脂粉乳は同9.7%増の8万9908トンとなっている。

図4 北海道生乳移出量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

(酪農乳業部 古角 太進)

鶏 卵

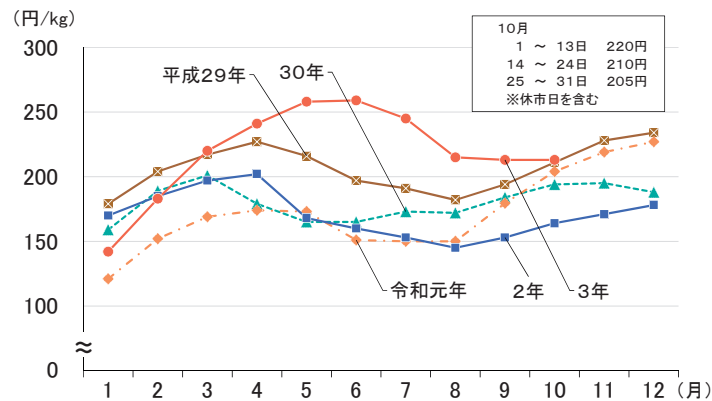
鶏卵卸売価格は8カ月連続で前年同月比高で推移

令和3年10月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり213円（前年同月比49円高）と8カ月連続で前年同月を上回った（図1）。鶏卵卸売価格は、気温の上昇に伴い低下し、夏場の低需要期に底を迎え、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。本年も気温の上昇に伴う需要の減少などにより、夏場は下落傾向で推移したものの、昨冬の高病原性鳥インフルエンザの発生により採卵鶏の殺処分羽数が多かったことなどから、同価格は前年を上回って推移している。10月は、直近5カ年の同月の中で最

も高い価格水準となったものの、月初の同220円から25日には同205円まで下落し、例年の傾向である10月中の価格の上昇は見られなかった。

今後について、供給面は、例年同様、最需期に向けて生産がピークに達すると見込まれる。需要面は、全国の緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置の解除に伴い外食需要の回復が期待されるとともに、年末商戦の盛り上がりに加え、おでんなどの季節需要がさらに高まると見込まれる。

図1 鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：J A 全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

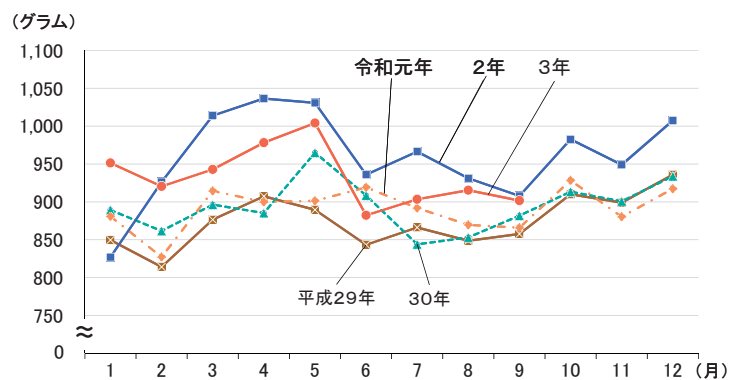
家計消費購入数量、前年同月を下回るも高水準

年間260万トン程度生産される国産鶏卵は、約5割が家計消費用として、約3割が飲食店など向けに業務用として、約2割が食品メーカーなど向けに加工用として仕向けられており、家計消費が国産鶏卵の需給に与える影響は大きい。

家計消費の動向を見ると、9月の鶏卵の家計消費量（全国1人当たり）は、902グラム（前年同月比0.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図2）。令和3年の月ごと

の家計消費量は、2月以降、巣ごもり需要の拡大により消費量が伸びた2年の水準を下回って推移しているものの、前年同月との差は7月は63グラムだったが、9月は6グラムまで縮小した。なお、COVID-19流行前の5カ年（平成27年～令和元年）における9月の平均消費量（851グラム）と比べると51グラム多く、引き続き高い水準と言える。また、1人当たり支出金額については、小売価格の上昇により294円（同7.6%増）と前年同月をかなりの程度上回った。

図2 鶏卵の家計消費購入数量の推移（全国1人当たり）



資料：総務省「家計調査」

（畜産振興部 前田 絵梨）